

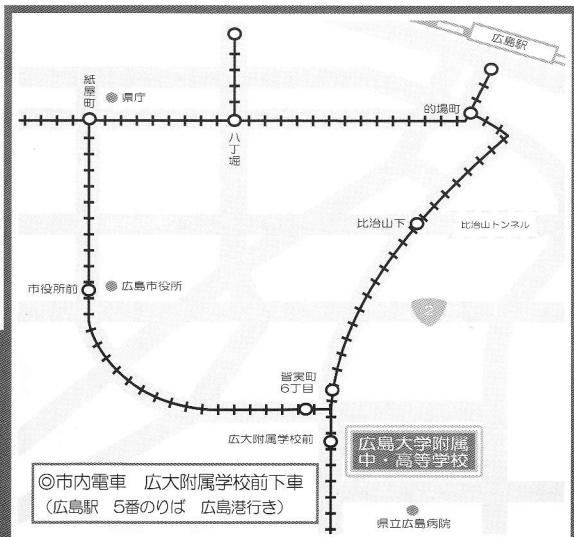
廃虚と化した広島の中で、被爆の翌年から音楽で広島を勇気づけようと奔走した若者たちがいた。彼らの名は「広島学生音楽連盟」。彼らの願いは今、想いが詰まった場所、音楽、そして映像を通じてよみがえり、次世代へと継承される。

広島が焦土と化したあの日から一年後——。
 広島の中では若者たちの歌声が響いていた。その歌声の主は「広島学生音楽連盟」。戦後の混乱期中、旧制高校6校の学生たちが集い結成した100人余りの合同合唱団。彼らはドイツ歌曲などを歌ったほか、市内に残ったほんの僅かな建物を使い、日本を代表する音楽家を次々と招いて演奏会を開催した。その目的の一つは、学校の復興資金を集めるため。そして、もう一つは広島を音楽で元気にするため。

そんな彼らが実際に使用した演奏会会場で、唯一現存する建物がある。それが今回のコンサート会場「広島大学附属中・高等学校 講堂」である。彼らの想いが詰まったこの場所で、「ヒロシマ・音の記憶 Vol. 4. ~継承~」は、ドキュメンタリー映画「音の記憶・つながり」の上映、そして「広島学生音楽連盟」や「ヒロシマ」にゆかりのある楽曲の演奏を通して、音楽と共に駆け抜けた若者たちの姿、そしてそれを継承することの意味を見つめる。

今回、彼らの意思を継承し演奏するのは、現役の高校生を始めとする現代の若者たち。

「何もなくても、歌は歌える」「音楽が力を与えてくれる」——。「広島学生音楽連盟」のメンバーが抱いていたその強い想いが、現代の若者を通して、今よみがえる。



PROGRAM

<第一部>

ドキュメンタリー映画「音の記憶・つながり」(68分)

監督・撮影：青原さとし

企画：「ヒロシマと音楽」委員会

製作：「ヒロシマと音楽」委員会、NPO法人ANT-Hiroshima



<第二部>

独唱

- ・ジャコモ・プッチーニ/作曲
 オペラ《蝶々夫人》より アリア「ある晴れた日に」
 オペラ《ジャンニ・スキッキ》より アリア「私の愛しいお父さん」
- ・エドモンド・ブランデン/作詩、山田耕筰/作曲 (原寛暁 編曲)
 「ヒロシマ、一九四九年八月六日に寄せる歌」

合唱

- ・大木惇夫/作詩、山田耕筰/作曲 (原寛暁 編曲)
 「ヒロシマ平和都市の歌」
- ・フランツ・シューベルト/作曲
 歌曲集《冬の旅》より「菩提樹」
- ・ロベルト・シューマン/作曲
 「流浪の民」
- ・谷川俊太郎/作詩、松下耕/作曲
 「信じる」

弦楽演奏

- ・ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル/作曲 (原寛暁 編曲)
 「ラルゴ」



広島大学附属高等学校 管弦楽班



広島大学附属高等学校 合唱班



乗松 恵美 (ソプラノ)

「ヒロシマと音楽」委員会について

被爆50周年を機に「ヒロシマ」をテーマとする音楽作品のデータベース化を行うために結成され、2006年には音楽作品のリストを掲載した『ヒロシマと音楽』(汐文社)を出版。現在もデータ収集事業を中心に活動を行っています。詳しくはホームページをご覧ください。

<http://hirongaku.com/>